



平和記念資料館にて① 8月6日



平和記念資料館にて② 8月6日



灯ろうを放流 8月6日



碑めぐり講話① 8月7日



碑めぐり講話② 8月7日



帰りの広島駅にて 8月7日

### 3. 感想文

#### 多くの人に戦争の悲惨さを知ってもらうために

東海中学校 小倉 丈

73年前の8月6日、午前8時15分広島市上空に1つの原子爆弾が投下されました。僕がこの広島平和使節派遣団に参加した理由は、以前鹿児島県にある知覧特攻平和会館の資料館や記念館に行っていたことがあり、僕と同じ年代の人達が戦争で死んでいったことに衝撃を受けたからです。

何も見えなくなるような一瞬の閃光、そして摂氏100万度を超える熱線と放射線、爆風で街が吹き飛び、平和な生活はなくなり多くの命が奪われました。その中には「水、水をください」と言いながら水を求め、川や防火水槽に頭を突っ込むようにして亡くなった大勢の方々……。僕はこのような戦争の悲惨さをもっと伝え、少しでも世界平和へ貢献できればと思い、参加を決意しました。

派遣1日目に被爆者講話を聴き、2日目は平和記念式典に参列し、平和記念資料館や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学をしました。3日目には、平和記念公園を訪れました。どれも貴重な経験となりましたが、その中でも僕が一番印象に残っているのは被爆者講話です。

講話をしてくださった大隅勝登さんは、当時の生々しい情景が鮮明に浮かぶようなお話をしてくださいました。当時小学2

年生だった大隅さんは爆心地から約2.5kmのところにある工兵橋周辺で被爆しました。家へ帰ると、近所の家は崩れていたものの、幸いにも大隅さんの家は崩れていなかったそうです。大隅さんは帰ってすぐに身体を洗い流し、庭で育てていたトマトを麻の袋いっぱい詰めて、山の方へと母と弟2人と一緒に避難しました。夜が明け、昼頃家へ戻ってみると、家の中は割れた窓ガラスが散らばり、天井は剥がれ、足の踏み場もない悲惨な状況でしたが、町内会の方々が一緒に片付けてくれて、しばらく近所の3つの家族で過ごすことになったということでした。

何十年も経っているのに、まるで昨日のようにはっきりとお話ししている大隅さんを見て、小学2年生という幼い子供の記憶にも深く刻まれるような出来事だったということを実感できました。近くを流れる川の土手には多くの遺体が並べられ、水面を埋め尽くすほどの遺体が浮き、その身体が潮の満ち引きであたかも生きているかのように行ったり来たりを繰り返していたそうです。

また、遺体処理のため近くの公園で火葬された遺体は800体を超え、そこから発生した臭いはとても言葉にはできないものだったとのことでした。その状況が何日も何日も続いたと聞いたとき、僕は自分の頭で想像することができなくなってしまいました。平和な日々が当たり前になっている今の人々は、同じような状況に陥るのではないのでしょうか。もし僕がその場にいたら、悲しみと恐怖のあまり足がすくんでしまいそうです。

今の日本は平和である、そう考える人がほとんどだと思います。しかし、世界に目を向けてみるとどうでしょうか。世界にはまだまだ紛争が続いている国があり、テロやデモが頻繁に起こっている地域も少なくありません。僕は、本当に平和だと言えるには、世界中どこに行っても争いがない世の中であることが必要不可欠だと考えます。そんな世界をつくるには、世界中の人々にも同じような考えを持ってもらわなければいけません。そのためには、まずは日本中の人々に平和について考えてもらわないといけないと感じました。

今現在、戦争を経験した方の平均年齢は80歳を超えています。戦争の悲惨さを忘れないためには、僕たちのような若い世代が戦争の悲惨さを知り、次の世代に伝えていかなければいけないと思いました。今回、貴重な機会をいただき、このような経験をできた僕は、このままで終わってしまうのではなく、現地で感じたこと、考えたことをこの先少しでも多くの人に伝えていきます。



## 広島平和使節派遣に参加して

大崎中学校 桜井 瑠海

今から73年前の8月6日、午前8時15分、広島に世界で初めて原爆が落とされました。

今回僕は、平和使節派遣生として広島を訪れました。現在の広島の町はとてもきれいで、73年前この場所に何にも無い焼け野原が広がっていたとは、信じられません

でした。

1日目は、被爆者である大隅勝登さんにお話を伺いました。大隅さんは7歳のとき、登校中に原爆の被害にあわれました。ピカッ、ドカーン、その後空からは沢山のガラスの破片が降ってきて、あちこちで民家が燃えている中を走って帰宅したそうです。土手にも川にも沢山の死体があり、その死体を焼却しているときの臭いは一生忘れられないとおっしゃっていました。白血病で亡くなられた方、失明された方、がんで苦しまれた方達の話には、とても胸が痛み、悲しくなりました。大隅さんご自身も被爆されたことで、健康を害され、80歳の今でも通院されているそうです。

2日目は、平和記念式典に参列しました。式典には、ご遺族の方をはじめ、総理大臣や各国の代表の方々も沢山出席していました。

私は黙祷で、「もう戦争は起こしません。安らかにお眠りください。」と祈りました。広島市長は平和宣言の中で、「人類が歴史を忘れあるいは直視する事を止めた時、再び重大な過ちを犯してしまう」と話していました。私達がここ広島に来た意味は、本当の戦争の恐さ、辛さ、痛さ、命の大切さ、平和の大切さを、未来に伝えていく為のだと強く思いました。

式典の後、平和記念資料館を見学しました。強烈な熱線によって、皮膚がはがれ、ボロボロになった人や、焼けて瓦礫しか残っていない町の写真などを見ました。後障害で白血病やがんで亡くなられた方も多数いらして現在も原爆は被爆者の方の健康を脅かし続けているそうです。広島で



目にしたことは、一生忘れることが出来ないようなものばかりでした。原爆の恐ろしさを強く感じました。

3日目は、西岡由起夫さんから碑めぐりの講話をしていただきました。西岡さんに実際に、広島を歩いて案内していただき、碑をめぐりながら聞いたお話は、どれも胸がはりさけそうになるくらい辛くて悲しいものでした。テレビや本で見たり、読んだりしたものとは違い、直接心に響いてきました。その中でも建物疎開作業中に犠牲になった沢山の子供たちの名前が刻まれた碑がとても心に残っています。僕と同じ年齢の子供達です。今の世の中では考えられない悲惨なことでした。私は、今回広島派遣に参加して、命の大切さや平和の大切さを学びました。そして、普段何気なく生活している毎日がどれだけ幸せで、どれだけ有難いことなのかを改めて実感しました。この幸せを守るためには、1人1人が平和について考えていかなければいけません。

被爆者の方が高齢化している今、僕たちが見て、聞いて、感じたことを1人でも多くの人に伝えていきたいと思います。



## 「平和に向けて」

浜川中学校 二上 翔

「日本政府には、核兵器禁止条約の発効に向けた流れの中で、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現するためにも、国際社会が核兵器のない世界の実現に向けた対話と協調を進めるよう、その役割を果

たしていただきたい。」と安倍内閣総理大臣の前で広島市長が訴えたことを今も鮮明に覚えています。

私が、今回の広島平和使節派遣で学んだのは、平和は願うだけではなく、見たり聞いたり知ったりするなど実際に行動をおこすことが何より大切であるということです。この考えの土台となったのが今回の平和使節派遣での3つの体験です。1つ目は、広島平和記念式典です。まず、参列している方々の人数に驚きました。そして、他国の方々も参列されていました。ここから、多くの人々が平和を願っており、その気持ちは、世界で共通だと感じました。式典の中のさまざまな話の中で最も印象に残ったのが、冒頭でも挙げた広島市長の言葉です。「役割を果たしていただきたい」という言葉から、広島の人々が平和を願う信念を感じました。2つ目は、被爆者講話です。大隅勝登さんから伺ったお話は、私の想像を遙かに超えるものでした。私は、川に死体が浮かんでいたり、辺り一面が燃えていたりしたことや瀕死の状態の人を助ける余裕がなかったことを知りました。このことから、当時は生きることが精一杯だったと感じました。3つ目は、広島平和記念資料館の見学です。館内で見たさまざまなものから、私は自分が戦争や核兵器についてほとんど理解していなかったことを知りました。なぜなら、被害の規模や状態、核兵器の仕組み、後遺症など自分の知らない多くのことを詳しく学んだからです。私は、戦争や核兵器での被害を「大変だった」という言葉で済ませてはいけなかったと思います。もっと多くの人々が被害の実態を

詳しく知ることが大切だと思うので、自分も広島で戦争の実態を学んだ者としてこの事実を語っていきます。

最後に、私はこの広島平和使節派遣で以前から抱いていた核兵器の廃絶を実現させるという思いがより一層強くなりました。また、「戦争は失うものばかりであり、実際に太平洋戦争では日本以外にも多くの国の人々が亡くなっている。こんな無意味な争いは一刻も早くやめるべきである。そして、今こそ国と国とが手を取り合って、世界の恒久平和と核兵器の廃絶に向けて取り組んでいくべきである。」という戦争に対する自分の意見をしっかりと持てるようになりました。現在、シリアやイラン、イラクなど世界の至る所で戦争や紛争が何度も起こっており、犠牲者の人数は増え続けています。関係の無い人々の命やこれから輝いていくはずの子どもたちの命を奪う戦争を私は許せません。私は、派遣での経験や学んだこと、そして自分がそこから考えたことを多くの人に伝え、少しずつでも1人1人の戦争や核兵器に対する考え方を変えていきます。



## 「あの出来事を忘れないために」

鈴ヶ森中学校 野村 春花  
昭和20年、8月6日、この日広島に「原子爆弾」が落とされました。あれから73年経った今、私は広島を訪れました。私は今回行って2つのことが特に印象に残りました。

一つ目は、広島平和記念資料館で見た展

示物です。「血のついた服」「焼けている三輪車」「少し変形してしまった弁当箱」など当時の悲惨さを物語るようなものが展示されていました。そして、本当にこの広島に原子爆弾が落とされてしまったのだと改めて実感しました。たくさん展示されていた中でも特に心に残っているのは白血病で死んでしまった佐々木禎子さんが折ったとても小さい折り鶴です。今でも63年前に折られたものとは思えないくらい、とても綺麗に保存されていました。佐々木さんは医者から余命宣告をされていて、正直いつ亡くなってもおかしくない状況であったにも関わらず、「生きたい」という気持ちが彼女の折り鶴からヒシヒシと伝わってきました。彼女のその願いが込められた折り鶴には、未来への希望を感じることができました。

二つ目は、平和記念式典での「平和への誓い」です。その中の「人間は美しいものを作ることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものを作ってしまうのも人間です。」私はこの言葉を聞いて、改めて大切なことに気付かされました。「原爆投下」は我々と同じ「人間」がやったことです。今、この時代には、原子爆弾より威力の強い水素爆弾などがあります。水素爆弾などの核を保有している国はたくさんあります。この世界から核をなくすには、私たちだけでなく、たくさんの人たちが伝えていき、核廃止に向けて一人一人が考えて行動しなくてはならないと思います。

今回の広島平和の派遣に参加して、私はとても多くのことを学びました。それは広

島に実際に来て、多くのものを見て、多くの方とふれ合うことで、73年前のこの出来事がどれほど私たち人間の歴史の中に深刻なことであったかを知ることができました。21世紀になり、広島原爆投下が日に日に歴史の記憶から薄れ始めている現代にあって、けっして、あの出来事を忘れないために、今を生きる私たちが未来に向けてやらなければならないことがわかったような気がします。



## 「戦争の恐ろしさを学んで」

富士見台中学校 田中 凜

先日のニュース、新聞で報道されたアメリカと北朝鮮の会談で核兵器について取り上げられていました。核兵器については小学校やテレビなどで学んだ事があり、どのようなものかはすでに知っていましたが、今回の広島派遣に参加して改めて恐ろしさについて知る事ができ、とても考えさせられました。

1945年8月6日午前8時15分、広島に原爆が投下されました。一つの核兵器により広島に住んでいた、40%の尊い命が奪われました。何の罪もない命が原子爆弾一発で失われ、住む場所や感情までも一瞬で消滅させてしまったのです。あれから、73年経った今、私は広島で原爆が投下され、たくさんの命が奪われたことで強い悲しみと同時に、この悲劇を二度と繰り返してはいけないと思いました。

私はこれまで広島・長崎への原爆投下についてテレビや新聞などで見ていただけ

でした。しかし、実際に広島に行き、お話を聞いて・見て・感じてどれだけ大きな過去の過ちかを理解し、当時の悲惨さを伝えていかなければならないと思いました。

実際に広島に行った初日、被爆者の大隅さんからお話を聞きました。その中でも印象に残っている事が二つあります。一つ目は、原爆投下後、被爆された地域の近くにあった川にたくさんの人が飛び込んだと言います。その後、川の水が見えなくなるぐらいの人の死体が浮いていて川の流れによって人の死体も行き来していたという事を聞きました。その死体を引き上げる度胸のある人もいなく、とにかく自分の事で精一杯であったそうです。

二つ目は、「原爆を落としたアメリカを憎んでいるか」という質問に対して、そんなことを言ったことでこの先何も変わらない。と話していたことです。自分の家族や友人をアメリカの原子爆弾で失い、とても恨んでいるだろうと思っていたためとても驚きました。その話を聞いて被害を受けた過去の事を訴えるのではなく、今後同じようなことが二度とおこらないように、核兵器を保持する意味を問いかけていく事が大切だと気がつきました。

この広島派遣を通して、この世界が「平和」であることは決して当たり前の事だと思っはいけないと思いました。私達は産まれてから毎日食事をして、家族と会話し、楽しく一日一日を過ごすことが普通でした。戦争中は苦しい事ばかりで今のよう暮らしは送れません。また、今ある平和がこれから先もずっと続くような保障もありません。そのため、核兵器の恐ろしさを

知り、今後の日本の未来を担っていく私達がより多くの人に発信して、同じことの繰り返される世界にならないよう、まずは自分から行動していきます。



## 「平和を作るために」

荏原第一中学校 金子 耀平

今回の広島平和派遣で学んだこと、それは世界の人たち全員が「平和」を望んでいるということです。

その理由は、5つあります。

まず被爆者講話で大隅さんは、紙一枚では埋めきれない程細かく当時の状況を伝えてくれて、僕は平和を強く望んでいることを感じました。戦争のときは自分が育てていたトマトを母にとってこいと言われて山に逃げて、夜はやぶ蚊と戦ったときの思い出、そして、原爆が落とされた2日後、一生忘れられないという死体を焼く臭いが町を襲った時のこと。原爆は誰もが苦しむ最悪のことだと改めて考えさせられました。被爆者の方々の平均年齢が82歳を超える今、体験談をみんなに伝えることは、改めて大切なことだと思います。

次に広島平和記念式典に参列して、広島市長が安倍首相の前で核廃絶を訴えたとき、参列者の多くの人に「そうだ、そうだ」という雰囲気があったことを今でも覚えています。

広島市長は「黒い雨降雨地域」を拡大することを強く求めている、僕はその意味を放射能が降った地域を拡大することで、より多くの被爆者を助けてほしいということ

だと解釈し、そうするべきだと思いました。子供代表の小学生が、「人間は美しいものを作ることができる、人々を助け笑顔にすることができる、しかし恐ろしいものを作ってしまうのもまた人間である」と言ったことに僕は強く共感しました。そして世界の86カ国が参列した記念式典で配られたパンフレットが、英語で書かれていることで広島のことを外国にしっかり伝えることができると思いました。

灯籠流しで書かれていた文字は「平和」という言葉が一番多かったです。僕はそれを、水を求めてなくなってしまった人たちに二度とこんなことが起こらないようにするというメッセージだと感じました。

碑めぐり講話では、70年間植物が育たないといわれていた広島が復興する際、植物が育っていたことでとても元気づけられたと聞きました。碑には戦争を非難し、平和を願う詩がとても多いと感じました。被爆したレンガの前では核兵器廃絶を誓っていました。禎子の碑の下には全国各地から来た千羽鶴があって驚きました。

原爆ドームは現存している被爆した建物で、広島に原爆が落とされたという象徴でもあり、その中には支えの柱が組み、未来に残してみんなに見せたいという思いが強く、被爆当時の鉄柱が折れ曲がった状態で残っていて、写真だけでは分からない原爆の怖さが直に感じられました。

最後に僕が「原爆によって壊されたものはどこへ行ったのか」という質問に大隅さんは「分からない」と答えました。僕は、今、被爆者の平均年齢が82歳を超える中、その壊れたものを見せることでより原爆の



怖さが伝えられると考えました。

今回、広島平和派遣に参加し、平和、平和と唱えるだけでは何も始まらず、過去の過ちを見直し、未来へ生かさなければならぬと思いました。



## 一人一人の気持ちで

荏原第五中学校 牧田 沢英

1945年8月6日午前8時15分、人類史上初の原子爆弾が広島に投下されました。爆心地周辺の地表の温度は3,000～4,000℃に達し、広島は一瞬にして焼け野原と化しました。そして、罪のない約14万人の尊い命、たくさんの人の幸せ、当たり前の日常が奪われました。

地獄のような光景が広がったあの日から73年、私は品川区平和使節団の一員として広島を訪れました。広島は、本当に原子爆弾が落とされた場所なのかと疑うほど綺麗な場所でした。路面電車が走り、多くの建物があり、街はとても賑やかで、平和記念公園の周辺は豊かな自然であふれていました。戦争の悲惨さは見えず想像との違いに驚きましたが、中には戦争の恐ろしさがひしひしと感じられる場所がありました。それは、原爆ドームです。そこだけ時間が止まっていて、原爆が落とされた事実や戦争の恐ろしさを私たちが忘れないように思い出させてくれているために存在しているような気がしました。

被爆者の大隅さんに当時のことを伺いました。それは私が思っていたよりも遙かに

恐ろしいものでした。京橋川の神田橋の土手には遺体が並べてあり、満潮時には遺体が川を行ったり来たりしていた話を聞き、心が痛みました。

しかし、このような話からは背を向けてはいけないと思います。今私たちが送っている生活は、当たり前のことではないと気づかされました。学校に行き、勉強をし、友達と笑い合い、家族と食事をする当たり前の日々。当時は当たり前ではなかったのです。友達と別れるとき、「また明日」と言えるのも、明日のことを考えられるのも、明日が来ると分かっているからです。それがどんなに幸せで平和なことなのかを忘れてはいけません。

広島平和記念式典には、多くの日本人、外国人の方が参列していました。外国の方も平和について考えていると知ることができて嬉しかったです。広島に起こった出来事に世界の人に関心を持っていることが感じられました。私が広島平和記念式典に参加して周りの人に伝えたくなくなった言葉があります。

「人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。」

この言葉を聞いて、笑顔にするものをつくるか、恐ろしいものをつくるかは自分の意識次第なのではないかと思いました。恐ろしいものをつくらないという強い気持ちを持っていれば、恐ろしいものがつくられることはないはずです。黙祷を捧げたとき、平和を願う人の心が一つになったような気がしました。世界中の一人一人が平和



を願う思いを持っていれば、戦争が起きることはないと思います。

世界中の一人一人が平和について考えるのは難しいことかもしれません。

しかし、「戦争は二度と起こしてはいけない」という気持ちをそれぞれが持つだけでも平和につながります。私たちには、当たり前の日常を未来につなげる責任があります。一人一人の思いは、集まれば大きな力になります。その思いを持つことは二度と戦争を起こさないために必要なことだと考えます。



## 「平和の為に私たちができること」

荏原第六中学校 住田 彩葉  
広島平和使節派遣を通して「平和」は一言では表せないほど深いものだと感じました。そして、新たな考え方を持つことができた充実した3日間となりました。

「平和」と聞いて、思いつくことは何でしょうか。私は広島に行くまで、戦争や争いがない世界、そして差別やいじめがなく一人一人が幸せに生きることが「平和」の全てだと思っていました。しかし、この訪問でいろいろなものを実際に見聞きして、考えを共有することで、様々な平和のとらえ方を知り、自分の考え方が大きく変わるきっかけとなりました。

広島的第一印象は、73年前の姿を想像できないほどの賑やかさと、たくさんの緑でした。行き交う人々の笑顔がとても印象に残っています。私たちは、蛇口をひねれば水が出る、毎日学校に行ける、好きなこ

とができる。それが当たり前の生活です。しかし、73年前の広島は、そんな「当たり前」のことができず、ただ今を生きることでやっとだったのです。

被爆者講話では、大隅さんが当時の気持ちを語ってくださいました。親しい大切な人達を何人も奪った原子爆弾、そしてそれを落としたアメリカを「憎んでいない」と大隅さんはおっしゃいました。なぜなら、今を生き抜くことが大切で、そのことに必死だったからだそうです。これを聞いて明日はあたり前ではないことを知りました。大隅さんは、戦争がなく、楽しく家族とあたり前な時間を過ごせるだけで幸せだと感じていました。身近なちょっとしたことで幸せを感じられることはとても素敵なことで、その思いが増えたら、「平和」な世界に近づくのではないかと思います。

意見交換会では、「平和」への考えを皆で共有しました。その中で、人によって「平和」は違うということを知りました。例えば、好きなことを楽しめる世界や、大隅さんのように身近な幸せを感じられる世界など、いろいろな意見を聞くことで様々な視点から「平和」について考えることができました。だから、学校のみならず「平和」について考え、他の意見を知り、様々な方向から「平和」を知ってほしいので、私はそのきっかけを作る人になろうと思いました。

私たちが今、戦争を止めたり、核をなくそうと思っても、そう簡単にはできないでしょう。しかし身近なことでも平和への第一歩になることはたくさんあるのではないかと考えました。それは、互いの考えを知

り、優しさを持つことだと思います。優しさで人を幸せな気持ちにすることは、平和な世界を作るうえで、とても大切なことです。だから、今の「平和」な日々を守る為にも、今回ヒロシマで見たこと、考えたことを忘れず、優しさをもって「平和」な世界を作りたいと強く感じました。



## 託された使命

戸越台中学校 清水 結莉

「人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。」

これは平成 30 年（2018 年）8 月 6 日に行われた広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式の誓いの言葉だ。私はこの言葉がとても心に響いた。

73 年前の 8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島に「絶対悪」と言われる原子爆弾が投下された。きのこ雲の下では何の罪もない人々が殺された。昭和 20 年（1945 年）8 月 6 日から同年 12 月末までの死亡者数は約 14 万人と推定されている。今まで奉納された原爆死没者名簿に登載されている人は 31 万 4108 名にも上る。しかし、いまだに亡くなった方の正確な人数は分かっていない。

平和記念式典が行われた日の午後、私たちは袋町小学校平和資料館や平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れた。多くの方の遺品が展示され

ていた。それらはどれも原形がわからないほど焼けた後があった。その中でも私は国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で知ったことにとっても心が打たれた。それは爆心地から 1km にも満たない場所で被害を受けた広島県立広島第一中学校だ。当時は県内屈指の名門校で目指していた学生も多かったそうだ。8 月 6 日の朝、「行ってきます。」といつものように家を出て学校に向かった。その日は奇数組が外で建物疎開、偶数組が教室で待機だった。そんな時原爆の被害にあった。一中の生存者は 10 人にも満たなかった。「一中の生徒は全滅だ。」という言葉が生徒の両親の耳に入ったそうだ。私には想像もつかなかった。私と同じ中学生なのに…。とてもとても尊い命なのに…。生きいていた時代が違うだけなのに、こんなにも苦しくて悲しい経験をしたのだ。考えただけで胸が痛くなった。だから私たちは 73 年前の中学生たちがどんな思いで必死に生きようとしたのかを知らなければいけないと思う。

73 年という月日が広島を復興させてきた。73 年という月日をかけて広島は原子爆弾の怖さを世界に伝えてきた。実際に被爆された方も辛さを乗り越え、当時のことを語ってきてくれた。私たちは原爆のことをもっと知らなくてはならない。そして後世に伝えていかななくてはならない。それは、被爆者が年々減ってきている中、日本を原爆が落とされた最初で最後の国にするためにも。私たちには未来がある。遠い遠い所まで未来がある。その未来をずっと平和で過ごすためにも昭和 20 年（1945 年）8 月 6 日午前 8 時 15 分に何が起き

たか知らなければならぬ。伝えなければならぬ。それが私たちに託された使命だから。



## 「平和」とは何か

日野学園 鈴木 茜

今、あなたが見える景色の中から、希望の光が消えてしまったとしたら、あなたの大切なものが一瞬にしてこの手から抜け落ちてしまったとしたら、そんなことを想像しながらこの感想文を読んでいただくと光栄です。

「平和」とは何か。戦争をしない、争いをしない。果たしてそれだけが「平和」なのでしょうか。それならば、今、日本は胸を張って「平和な国である」と言えるのでしょうか。この簡単なようで難しい問いを明らかにするために、私は広島平和使節派遣に参加しました。

広島に着き、街を見て思ったことは、東京と変わらず、賑やかな都市だということです。この地で73年前に原爆が落とされ、75年間、草木が生えないと言われていたとは到底思えませんでした。しかし、被爆者の講話を聞いたり、原爆ドーム、平和記念式典、平和記念資料館に行ったりしたこの3日間で、改めて戦争の悲惨さを痛感することができました。

「平和」とは何か。この問いが明らかになったのは、ある2つの言葉でした。

1つ目は、初日に聞いた被爆者講話での言葉でした。話してくださったのは、八十八歳の大隅勝登さんという方です。大隅さ

んは大きな病気に何回もかかったそうですが、私たちのために熱心に話してくださいました。7歳のときに被爆し、頭、肩、胸、背中にガラスの破片が刺さったそうです。しかし、痛みも感じずに急いで家に戻ったとおっしゃっていました。そんな耳を塞ぎたくなるようなお話を聞いた最後に、私は大隅さんに質問をしました。私が「戦争によって多くの人が苦しみ、それを踏み台にして今の日本があるということについてどう思いますか。」と聞くと、少し静まりかえり、大隅さんは低く、悲しい声で「・・・人ごとだね。」とただそれだけをおっしゃいました。

2つ目は、2日目の広島平和記念式典に参加したときの言葉でした。真夏の暑い中、多くの日本国民、そして多くの外国人の方々が参列していました。式典の中で子ども代表の2人が発した「私たちは無力ではない」という言葉を聞き、前日に聞いた大隅さんの言葉を思い出しました。前日に聞いた大隅さんの「・・・人ごとだね」という五文字の言葉を思い出し、ハッと気が付きました。私たちは被爆者ではないので、その方の想いを知るには限界があります。それでもその方の想いに近づくことはできるのではないかと思います。だからこそ、相手の気持ちになって考え、相手の立場にたって想像することが「平和」であり、「平和」を築くことなのだ気付かされました。「平和」のために行動すれば必ず誰かに伝わります。無力だと思っていた私に勇気をくれました。

「平和」とは、相手のことを思い、相手の立場になって考えることだと思います。



そして、この「平和」の意味を多くの人に伝えていくことが、私たちが築ける平和なのだ、この3日間を通して強く感じました。また、戦争は、人生そのものや希望を奪うものなのだ、と改めて感じました。

最後になりますが、私を広島に連れて行ってくださった先生方、両親をはじめ、たくさんの方々へ感謝し、今できることを考えながら強く生きていきたいと思いません。



## 「平和とは」

伊藤学園 鈴江 翠花

皆さん、原子爆弾を知っていますか？そして、原子爆弾は恐ろしい武器だということを知っていますか？

私は今回の広島平和使節派遣で、平和について学ぶことができました。私はその原子爆弾についてこう考えました。

「原子爆弾は、あってはならないもの。

原子爆弾は、つくらせてはならないもの。

原子爆弾は、被害にあった人を一生苦しめるだけでなく、使った人にも一生後悔の念を抱かせてしまうもの。」と、考えました。

原子爆弾は、この世界にあってはいけないもの。つまり、原子爆弾は、何万人、何十万人、何千万人の人の命を奪うものです。そのような原子爆弾は、使うための研究や、つくる工場もあってはなりません。そして、つくるのも使うのも許さない社会であるべきです。使った人は、一瞬のうちにたくさんの命を奪い、その後、むごさのあまりに罪の意識にさいなまれるでしょ

う。被害を受けた家族は、一生そのことを悲しみ続け、原子爆弾を使った人を一生恨むことになってしまいます。お互いに幸せな人生を送ることができないと私は学ぶことができました。

そして、1945年、8月6日、午前8時15分。原子爆弾が日本の広島に、落とされました。約14万人以上の人の幸せ、命を失いました。

その日から73年が経ち、私は、平和記念式典に参列しました。式典には、大勢の人が参列しており、私は外国人の方々が多いと感じました。こんなに多くの世界の方々が、広島への原子爆弾投下に関心をもっていることや、「核兵器禁止条約」について世界で話し合われていることを知って、平和に近づこうとしていることを実感しました。

そして8時15分、私は亡くなった方々に黙とうを捧げました。大変静かな空気の中にいて、被害者の家族や、友人、その他の人の悲しみがひしひしと伝わってきました。続いて広島市小学校6年生による「平和の誓い」を聞きました。私は聞いて以下のところについて考えさせられました。

「人間は美しいものをつくることができます。

人々を助け笑顔にすることができます。

しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。

平和とは、自然に笑顔になれること。

平和とは、人も自分も幸せであること。

平和とは、夢や希望をもてる将来があること。」

私は、考えました。人間は他人を感動さ

せることもできるが、他人を悲しませることもありえる。平和とは、自然に笑顔になることができ、幸せで、将来に夢があることだと私は広島派遣で学ぶことができました。



## 『世界につなぐ平和のバトン』

八潮学園 石 弥織

一九四五年八月六日、午前八時十五分。広島に落とされた大きな原子爆弾。その場にいた誰もが想像すらしていなかったほんの一瞬の出来事。その一瞬の出来事は、たくさんの人々の命を奪うだけでなく、人々の身体や心に一生残る傷をつくってしまったのです。

わたしは、今回の派遣で戦争や原爆の恐ろしさや戦争に対する人々の想いを学びました。

派遣一日目、広島に着いて最初に感じたことは、「本当にこの地に原爆が落とされたのか」という気持ちでした。広島は、路面電車が行き交い、人々は楽しそうに笑っていて、活気あふれる街でした。

被爆者講話では、被爆者である大隅勝登さんにお話を伺いました。大隅さんが被爆してしまったのは小学三年生の頃だったと聞いて、今の私よりも小さい年齢で被爆してしまって本当に辛かっただろうなと思いました。

大隅さんのお話はとても衝撃的な内容で、私は戦争の恐ろしさを改めて実感しました。今回の被爆者講話でお話を聞き、大隅さんを始めとする被爆者の方々は、身

近な人や自分の幸せなど数えきれないほどたくさんを戦争に奪われてしまったと知って、二度と同じ過ちを繰り返さぬように、私たちが平和を伝えていかななくてはならないと強く感じました。

派遣二日目、この日は年に一度開かれる、平和記念式典が開かれました。その時に頂いたパンフレットに記載されていた子ども代表の「平和の誓い」に目を奪われました。その中の「人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。」という言葉が心に深く残りました。同じ人間どうして、争ってしまうのは本当に悲しい事です。だから、お互いを認め合いながら生きて行ける平和な世界になるよう私たちの世代から一人一人が考えていくべきだと思いました。

派遣三日目の碑めぐり講話では、たくさんの方々の碑を見させていただきましたが、一つ一つに平和を願う人々の想いが込められていました。この場所でたくさんの方々の尊い命が奪われてしまったと思うと、本当に胸が痛みます。

当たり前だった日常を一気に壊されてしまった広島の人々。その日常を取り戻すために、変わり果ててしまった自分たちの町で何年も何年もどのような想いで生きてきたのでしょうか。今の私たちは、家族や友達がいつも隣にいて、当たり前のように毎日学校に通っています。けれど、今の日常があるのは、多くの被爆者の方々のおかげです。だからこそ、この時代に生まれた私たちが、平和のバトンを次の世代に渡

す努力をすることが、世界中の平和につながっていくと思います。



## 核兵器なき世界を手にするために

荏原平塚学園 麻生 和勇斗

広島平和記念資料館で、入り口近くのパネルにあった少女の言葉が目に入りました。「国にとって父は何十万人の中の一人だったかもしれませんが。でも私には父が全てでした。」何万人死んだなどという、数字で表すことのできない悲しみ。全てをあの日に奪われてしまった人達の霊を偲び、その実態を知り、僕達はその場を離れられませんでした。

八月六日の平和記念式典では、八十を超える国々が参列し、多くの人々が、平和を祈っていました。核兵器廃絶への思いをこれだけの人が持っていることに驚き、広島市長の「核は無くさなければならぬ絶対悪である」という強い思いに共感することもできました。

被爆者講話では、小学校三年生で被爆された大隅さんの心の内を聞かせてもらいました。幼かった大隅少年は、突然カメラのフィルムを通したような光が見えたと思うとその後どうなったかは分からず、走っている中、民家が二軒焼けていたのは覚えていたそうです。家に帰ると頭、肩、胸、背中に刺さっていたガラスをお母さんが水で洗い流し、つばを付けてくれました。今はどこの家にでもあるガゼや包帯、消毒液も戦時中ではなく、

必要最低限の治療もできませんでした。終戦後も舌癌や肝細胞癌に悩まされ、心身を蝕まれながらも、妻がいて孫もいて、幸せだと言われた大隅さんに、胸につまるものを感じました。年々少なくなっている実体験者のお話を多くの若い人々に伝えることが僕達の使命であると思います。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、佐々木禎子さんの千羽鶴のお話を読みました。原爆症が治ると信じて鶴を折り続け、家族や家計のことまで考えていた優しさを見、思いやりの深さに驚きました。

碑めぐり講話では、西岡さんのお話で、新しい事を知ることにもなりました。原爆が落とされて広島はひどい惨状に見舞われました。しかし、日本ばかりがひどい目にあつたのではなく、日本も外国に戦争でひどいことをしてきた事を知り、「加害の面がある被爆」という言葉に強く胸を打たれました。家族や友人、学校を失ったつらさ、原爆への恨み、それも忘れてはいけないことではありますが、物事には多くの面があり、一方から見ただけでは分からない事があるのだと思いました。

広島から帰宅後、祖父が録画してくれていた番組で、福山工業高校で代々続けられている、より立体的に広島のある日をVRで再現する活動を見ました。被爆中心地にあった島病院周辺の町並みに原爆が落ちる直前、直後の変わりようからCGで再現して伝えようとしていました。真剣に考え活動している姿を見て、広島



派遣での体験と合わせ、私達一人一人に何が出来るか、何をすべきかと言うことを、人任せにせず考えながら生きる事が大切だと感じました。



## 73年経った今

品川学園 折原 羽海

1945年8月6日午前8時15分。

ヒロシマは一瞬にして地獄と化しました。平成最後の夏、私は初めて広島を訪れました。

第一印象は東京よりも涼しいという感じでした。街並みも東京にありそうな感じで不思議な感覚になりました。でも、路面電車を見て、品川区と違うなと感じました。

初日には、当時小学3年生で被爆された大隅さんに講話をしていただきました。死体が川に浮いているのに、誰も引き上げない話や、死体特有のにおい話など、たくさんの体験を話していただきました。傷は少ないもの、放射線により細胞が壊され、白血病になった方の話も聞くことができました。本などからは得られない思いなどを話して下さり、所々目頭が熱くなる場面や、耳をふさぎたくなってしまふような場面もありました。

2日目には式典に参列しました。平和の誓いの際に、小学生代表の2人が「人間は美しいものを作ることができます。人々を助け、笑顔にすることができます。しかし、恐ろしいものを作ってしまうのも人間です。」と言っており、その言葉が

胸に響きました。式典には、たくさんの外国の方々も参列しており、平和について考えている人は沢山いるのだなと実感しました。

その後見学した資料館では、被ばくによりざらざらになった瓦や溶けた瓶などもありました。また、放射線は被爆後も長期にわたり影響を及ぼしていることが分かりました。今も苦しんでいる方が大勢いることに驚きました。被ばくした時に人が着ていた洋服などもありましたが、とても洋服と言えるものではありませんでした。

その日の夕方には、午前中にみんなで作った灯ろうを流しました。私たちが流したのはまだ午後6時過ぎで明るかったので、あまり中に入っている火が点いているようには見えませんでした。夜ご飯を終えて見に行くと、一つ一つがきれいに光っていました。灯ろうを流している人の中には、日本人だけでなく、外国の方々もいました。そこには大きくPEACEと書かれているものが多かったです。日本語で書いてあるものもありました。その中で私は” world PEACE. No more war” と書かれているのに目が留まりました。世界平和。もう戦争はおこしません。世界の人々が平和を願い始めているのだと思いました。流すときにも、世界平和と言いながら流しており、改めて平和な世が続けばいいなと思いました。

路上には、自分で作詞・作曲したであろう平和の歌を歌った人もいました。ここでは、女学院の碑や原爆の子の像などについて、1つ1つ説明をしてください

ました。被爆した方の中には、自分も死にたいと思う方もいたというお話を聞きました。碑めぐりの講話をしてくださったのは、被爆2世で原爆投下後から10年後に生まれた西岡さんです。西岡さんはお母様が被爆していて、そのお母様についてもたくさん話してくださいました。

今回の派遣で、改めて平和の大切さを意識しなおしました。今、ご飯を食べられること、外で遊べることは、平和だからこそできることだと私は思います。私はまず平和についてよく理解するには、戦争の残酷さ、平和の尊さをしっかり理解するところからだと思います。そして、皆さんに分かってもらいたいことは、たくさんの方々がなくなり、平和に向けて復興しようとした方々のおかげで今があるということです。平和を願う人が増えたら増えた分だけ平和につながると思います。



## 平和とは

豊葉の杜学園 山下 悠眞

8月6日、町は燃え、人が亡くなり、活気があった広島はあとかたもなく消え去りました。

私達の想像をこえる恐ろしいことがこの「広島」で起こったのです。

今回、広島を訪れ「平和とは何か」をずっと考えていました。広島を訪れる前は「戦争のないこと」や「今の生活」などありきたりな言葉でしか表すことが出来ませんでした。

しかし広島を訪れ、昔の日本にあったことを知り、被爆者の方のお話を聞き、「平和」を身にしみて感じる事が出来ました。

私の思う「平和」とはありきたりな言葉ではなく「ただただ生きていて不自由のない生活を送れている」ということと「1人の力では平和はつukれない」ということです。

被爆者の方のお話で『今の生活は幸せですか』という質問に対し、『とても幸せです。今は孫もいて楽しいです。』と答えていました。今の平和はみんなが、「平和であってほしい」と願うから叶っていることです。このとき私は平和であることは幸せと同じものなのだと思います。

広島では色々な場所を訪れましたが、私は2つのことが印象に残っています。

1つ目は原爆ドームとその周辺を見たことです。原爆ドームは爆心地にとっても近く、建物は一部倒壊していたけれど原爆ドームだけは人々の希望により今まで残しているそうです。

この原爆ドームには、もう2度とこのようなことは起きてはいけないという願いが込められていると思いました。

2つ目は被爆者の方のお話です。被爆者の方は大隅さんといって当時9歳でした。被爆当時は、登校中だったそうです。空がピカッと光り、その場にしゃがみこんだそうです。しばらくして家に帰ると、大隅さんの顔や手足にはガラスの破片がたくさん刺さっていたそうです。被爆後の川は、やけどなどで水を欲する人や死体で埋め尽くされ、町全体は異臭がして、

黒い雨が降り、皮膚がただれている人が多かったそうです。そんなことが起きた後も原子爆弾は、大隅さんを苦しめました。被爆して何年か経つと、放射能によるがんに侵されてしまいました。原子爆弾を落としたのはアメリカです。しかし大隅さんはアメリカのことを憎んではいません。『憎んでも仕方がない』と言っていました。

こんなに苦しんでいるひとがいるのに世界から核はなくなりません。私は、な

ぜ核が必要なのか分かりません。しかし、世界から核がなくなるのに1歩進む出来事がありました。北朝鮮が核廃絶を宣言しました。このまま核が世界から無くなることを願っています。

私は、このようなことがもう2度と起こらないようにするためにも、私達から周りの人に何が起こったのか伝えていき、みんなで「戦争はしたくない」という気持ちで一致する日が来るようにしていきたいと思います。



## ≪派遣生の感想≫

(一部抜粋)

Q. 広島に行く前と後で、平和に対して自分の中で変わったこと（もしくは、平和について改めて感じたこと・考えたこと）。

- ・ 平和は、全員で作るべきもの。
- ・ 平和であることはあたり前ではないこと。
- ・ 「平和」という言葉でも、とらえ方がたくさんあるということ。
- ・ 日本だけでなく、世界でみんなが平和だと思えるようになりたい。
- ・ 言葉でいくら言っても分からないことがある。
- ・ 今の生活の平和を多くの人に知ってほしい。今の生活では考えられないことが起こった戦争の悲惨さを多くの人に学んでほしいと思った。
- ・ もっと平和について考えなくてはいけない。
- ・ 平和に対する思いは世界共通だということ。

Q. 同級生または後輩へ平和について一番伝えたいメッセージは。

- ・ 平和を壊すのは簡単だけど、平和を作るのは大変なこと。だからこそ、今の平和を大切にしてほしい。
- ・ 平和とは、ケンカや小さな争いをなくすだけでなく、皆が自然に笑顔になれること。
- ・ 戦争のことをよく知って、それが起こらないために自分のできることを考えることが、小さいけれど「平和」への一歩だということ。
- ・ 平和は戦争を深く理解し、みんなに伝えること。
- ・ 平和な世界を続けていくためには、一人ひとりが戦争は絶対にいけないということを知ることが大切である。
- ・ 日本で当たりまえに感じていることは世界では当たり前じゃない国もあり、だからこそ日本は平和だと言える。



## 4. 被爆者講話



### 被爆者講話

大隅 勝登 氏

【大隅】45歳のときに舌がんを患いまして、喉の調子がじりじりしてこんなんです。しゃべるのは、これが精いっぱい声なんです。おーい。これぐらい。大きな声を出さなきゃいけないのと、途中で咳が出たりする。風邪みたいにつりませんので、これは。これ（スプレー式の薬を指す）を補給しながらやってみようと思います。

じゃ、この赤いところが、ご存じのように壊滅状態。ほとんどと言うてええですかね。何人亡くなったかという数字が、いまだわからないんですよ。兵隊さんを入れて、数なんか、とにかく、ようわからんことが多いので、調べようはなし。

そういうことで大変なんだけど。ここに工兵橋ってあるんですよ。ここの近くに、当時、小学校3年生に属しておりました。

それから、当時、4年生から6年生は、集団的に田舎のほうへ集団疎開をさせられていて、あと小学校3年生以下は、おじいさん、おばあさん、くるめて家の中で生活しなさいと、こういう時代だったんです。なので、私はこの辺の工兵橋というところの近くに、学校と言うか、寺子屋と言うか、勉強しに行きよった記憶がないんです。あいうえお、かきくけこ、そういうのは親が教えるべきだとか、何かようわからんかったんですが、とにかく、そういうことしか習った記憶がありません。それで、「行ってきます」で行きよる最中の出来事でした。突然にピカピカと光ったら、ドッカーンという大きな音と悲鳴。それで、気がついてみ

たら、家に帰っていた。朝8時ごろだったけれども、「いってきます」と言って行って、帰る途中にそういうドカーンという音で、ああ、焼夷弾でも落ちたんだなと思っていた。ただ大きな爆弾が落ちたとか。原爆、水素爆弾。もう何か月たつて、あれということで、その時は大きな爆弾としか私らはわからなかった。近所の家が2軒ほど燃えとるのがちらっと見えた。それで角を曲がったところに石津さんという家が燃えとったから、そこから私の家まで200メートルぐらいの、ああ、もしかしたら、うちの家まで。すぐ燃え移るなと思いながら、「ただいま」って帰ったんです、家へ。それで、私とすれば、焼夷爆弾が、3、4つぐらい落ちたんだろうと思っていた。それで、家へ帰ったときに、うちのお母さんが私を見て、おーって。パンツ1枚に脱がして、全部着がえろと言われて、そのときの状況は、こちら辺にガラスのかけらがあつたんです。肩のところと背中へガラスみたいな破片が入っていたんですね。そんなのがぴゃーっと水でただただ洗うてもろうて、おーい、きれいになつた。よし、今からすぐうちの畑へ行って、トマトをこの袋へ入れてこい。「それでどうするん」言うたら、「ばかたれ。早く行ってこい」言うて、うちのほうへね。ああ、山上って逃げるんじやのと思って、今から見立山へ避難するけえ。消防車もおらんのじやけえ、うちのほうもすぐ丸焼けになるけえと、それから見立山に行くことにしたんです。

それぐらいに、とにかく、すごくいっ

ぱい焼夷爆弾が落ちたんじやろうの、それで、とにかく気がついたら、その晩は山で寝とったか、起きとったか、これが覚えてない。そこら中に蚊がね、ブーンといたけど、ヤブ蚊との戦いを朝、昼ごろまでおつたんじやろうと思うけれど。そこで8月6日の夜を山で過ごしました。



8月7日の何時ごろかは、覚えていないんですが、川へ行って見たんです。その前に家に帰ったときにびっくりしたのは、うちの家は燃えずに。ただし、家へ帰ったと同時にびっくりする。こういうふうな天井から全部やられて。一部、垂れ下がったり。廊下になっている床はなぜかなくなつとる。畳は窓ガラスの破片を受けて、あれは歩くのが難しいんですね、危ないから。気をつけ、気をつけて言われて入って行って。そこから神田橋へ行って見たところ、その土手っ原に死体がね、ごろごろと流れておつて。行ってみると、死体があたりに浮かんで、川を降りたり、上ったりしよるんです。何人かいるんです、そういうのが。あるいは原爆のラジウムとかそういう光線を吸い込んで、とにかく被爆者かな、みんな水が欲しゅうてかなわん。それで、そこへ行って、こ

うやって水を飲んで。それでね、死体を引き上げる人がいない。泳いで行って、死体を引き上げる。それだけの勇気がある人は誰もおらんかった。8月の6日、8月7日。そうこうしておる間で、土手へ上がると死体がウジ虫。そういうものがぼこぼこ出てきて、その臭いとか、さっきの死体が川づたいに全部、満潮、干潮で行ったり来たりしよったのを、すごい光景を今も覚えているんです。それから、そういう死体の処理は我々の焼却しかない。8月の6日から8日にかけて、一気に、何万人の数をそういう形で焼いたんじゃないかと。埋めるところがないけん。焼けた人たちは、おじいちゃん、おばあちゃん、女、子供ばかり。ぞっとするような光景だったね。死体や、その臭いって、生涯忘れることはできません。今でも覚えている。そういう臭いも、こうこう、こういう臭いがしたというのは、今ここでは言えませんが。



次に亡くなった方の例を挙げます。私らが住んでいるところの近くに住んでいる方。旦那は戦争へ行って、それで、4年生と6年生の兄弟は集団疎開でよそへ。一番下のアキちゃんというのと二人暮らしで生活しとるときに原爆が落ちた。そ

れで、たまたまイシカワさんが白島町の印刷工場で働いているときに、何やらピカッと光った後にドカーンって、気がついてみたらくらくら。什器の間に挟まれて身動きがとれず、8月の6日のお昼から8月7日の多分お昼ごろまで、わからんけど、誰かが助けよった。自分の家へ帰ってみると、ほとんど焼けて家がもうない。もう炎もくすぶって。それで、下におった小学校1年生のアキちゃんを探したけど、知り合いの人が預かっていた。ああ、生きてる。ああ、よかった、よかった。で、本人は、そのアキちゃんを探したヨシコおばちゃんは、ちょっとタベから何も食べていないんだけど。傷も、やけども、こういうところは全然ない。全くない。建物に入って、ああ、くたびれたって本人もちょっと横になるってそこにグターって、横になって。それで、看病する人はコップで水ぐらいはと…。ちょうど食べたり、飲んだり、1人では今はできないけんが。とにかくそこへ横になって、ヨシコおばさんが。2日目ぐらいかな、トイレに行きたいんやと。これは多分鏡を見たかったんだらう。髪がばさっ、ばさっ取れる、抜けるんですよ。これは急性白血病やって言われたんや。

3日目、4日目ぐらいになって、2日目に、食べ物も欲しくない、ゲボをうーっと出す。何も食わず、水も、食べるものもなしで、24時間たって、また24時間たって、どうなるかいうのを初めて。後でわかったんですが、ゲボがばーっと出るばかりで。洗面器、持ってこいと言ったと同時に、今度はハルオとサトコ、田

舎へ行ってからあれ、会いたい、会いたい。一番下のアキコとは、もう何も言わんで、ハルオとサトコに会いたい、会いたい。もう自分はだめだ思う言うね。もう肌で感じる。もうすごかったね、あれだけは。

当然、しばらくして、ハルオさん、サトコさんがお母さんに会える思うて帰ったら、お骨になっとる。そのお骨も確認したわけじゃない。ととととととと、何百いう、一遍に死体を処理するので、穴を掘るところもないし、ただ焼いてしかないという。焼いていくしかという。それも、次から次に、すっぽんぽんで焼くほうが一番いいみたいなんだが、何がしか着たもので焼くから、どうしてもパワーッと火が、燃え方があやふやもんじゃなしに。そういう焼却するのはまきです。まきがないので、崩壊した、焼け残った、まだ崩れている家の廃材を利用して、それをたき火じゃなしに、もうそれで焼いたと。



広島中の人たちは、その臭いが当分、体にしみついたり何かしていたんじゃないかね。それが何とテニスコートをやるぐらいの小さな牛田の公園で、800体から840体と言われております。これは全く数量確認ができておりません。700人

おったか、900人おったかも定かでないという。今じゃ考えられんことを当時は二次災害を恐れて、爆弾のそれじゃなしに、放つとつたら蔓延するじゃない。灰、猫灰だらけじゃないが、そういう。それを警戒したんじゃないかね。

それから、次に、通信関係のお仕事をされていた人のお話をすると、通信関係の通信業務で、7時ごろ会社へ行って、早出で、何か7時か、7時半ごろだったか、ようわからんけど、B29か何かを通ったような気がするが、サイレンが鳴らんけん、変じゃろうなと思いつた。それで、仕事を当たり前のようしよるところ、私はピカっていうのとドカーンという音を記憶していたんですが、そのシゲモリさんが見たのはシュルシュルシュルというような音がして、ガンというたらパーンと飛んできて、爆発音。眼鏡がすっ飛んだそうです。あっと思って、眼鏡が折れて、ここに何かガラスがあったんじゃないかね。こうやって取って。それで、途中で気がついて、こうやってやりおったけど、何かごみが入ったんじゃないかと思込んで、その人はそのまんま仕事をして。私も、小さいころの記憶ですが、そのおじさんはずーっと義眼のまんまだったそうです。普通の眼鏡をかけたのでわからなかった。こっちが見えけん、黒い眼帯の上に眼鏡をかけて。じゃけん、自動車も運転ようしよったけど、免許証は自動車の運転はなかった、完全に片目の人は難しかったんじゃないかね、その当時は。一生涯、義眼のまんまの不自由な生活をされていた例をあわせて報告。そ



れから、この方は亡くなったのは動脈瘤破裂でした。

次に、3人目、兄ちゃんの場合は、このお兄ちゃんの場合はやけどでね、足のほうもやけどがあるけど、膀胱炎。膀胱がんの判定を受けて、おしっこしたいな思うて、たたたとトイレにかける間に、もう間に合わんの。女性の方は男性、違うけんね。たったこれぐらいなのに、もうズボンにじわーっと。当時は国防色のようなズボンしかないの、それじゃけえ、初めお母さんに怒られた。おまえは早く便所へかけろと。2回目なんですね。いつもこの辺がシミになって。誰かが臭いって言うたか知らんけど、臭い思われるけん、何じゃろうね、女の子、何か遠ざかっていきよるし、おしっこについて、一番のあれよ、情けないことだろうね。たったこれだけのおしっこでも、積み積みよると臭うんだらうね。だから、臭い思われたらいかんというのが大変だった。

ちなみに、終戦直後の話、8月15、16日ぐらいから、だんだん復興とか何やかんやもあつたんですけど、これを思い出すと大変なことになるんで。今度は肝心の、その前に、青いトマトの例。これはうちのお母さん。立派な母親だったところを話したい。実はね、ぱっと考えたんです。米やら、何やかんや、ろくなのなかったけども、米があつたところで炊くところありませんのに。トマト、袋いっぱい、とにかく、おまえ、持てるだけ、これいっぱい入れてこい。見立山へ持っていくんじゃけえ、青いのを下へ

置くんじゃけえな。実はトマトって、青いトマトというのは食うたことがない。赤くなっているのが一番うまい。端から。できる端からこうやって拭いちゃ、食ってやったけども。下に青いのをしてやるんじゃよって。はい、言うて。また怒らしちゃいけん。思っ入れていった。



それで、明るる日、8月7日に、昨日のトマト、どこあるん言うて、うちのお母さんに聞いたら、食べたい。何を考えとる。あるわけない。これはやっぱり何時間か何かに1個、引っ張り出してくれよつたんです。それで山へ逃げて別の被災者を見つけてね、田んぼの中で、トマトくれる。それが欲しいって、頂戴よって。ええよって。二、三個やったら、あつという間に人が集まって、隠した。それで結局、あつという間に、それぐらいの大きさかな。これぐらいの大きさのトマト、青いトマトばかり。それを全部、もう帰るときにはなかった。全部、配って。配つとるし、自分たちも欲しかったんじゃが、なかったね。畑へ行ったら、まだあつたんじゃがね。帰ったときはね。しばらく食いつないだのは、ほかのことで食いつなぎしておりました。

それで、肝心な私の例になると、22歳

で大学卒業して、28歳ぐらいで、某中小企業の会社に入りました。当時いうたらね、就職難の時代よ。で、就職して、27、8ぐらいのときに、とにかく体がだるくていけんのです。これはやっぱり病名はよくわからんだけど、慢性肝炎いうてかね、慢性的に悪うなって。だから、入院して、2、3カ月、入院しとったらきれいに治るんじゃがのと言いながら、注射等、何やかんやで、何とかやってきました。それで、その後、順調に生活できたし、45歳のときに舌がん。べろのがん。あとは、大きい病気といったら、大したのはいないんです。実はこの舌がんから発生して、ここへ、ここの病気を肺へ行かさんために、何ちゅうけ、ようわからんけどとめるわけ。そこへとめ切れずにリンパ節もがんになる。でも、しょうがないけえ、ここをばさばさっと切ってやる。それで、これが46歳のとき。それから、今度は大好きなたばこを休み始めた。45歳だと思う。やめるわけじゃない。休む。せっかく人間だけが吸えるのに、たばこね。これをやめちゃいけん。実はそのときに父親が専売公社に勤めていた。たばこは親孝行じゃけん。

ところが、これは目のこの手術のときがね、最高にしんどかった。広島大学病院でばしゃんと切って、この辺とかこの辺で引っ張り出してつけるいう方法があるという説明を受けたんだけど、しかし、それよりも前に、これをラジウム針によって退治する方法がある。ラジウム針いうても原子力だね。それを放射線混じりでやったんじゃおかしくなると。そ

れをこの針にべろへ10本突き刺して、それで10日間、計21日入院していた10日間はそれで苦しみましたね。これを突っ込んだラジウム針を落ちちゃいけんけえ、全部ここでくくってあった、指のところへ。だから、ご飯は流動食しか食えん。それを鼻から食べさせて。毎日2本ほどもらったけれども、初めてそういう治療を受けたのが10日間かね。もう面会は謝絶、そのかわりテレビは見放題、ラジオも見放題。ご飯は自分で食べなさいと。ここから、鼻から突っ込んで、味も何もない、うまいとか、辛いとか、酸っぱいとか、わからない。急いで入れようと思ったら、もう下痢するんや、ピーピー、ジャージャー。じゃけん捨てよったら、こりゃいけん思うて、最終的に朝、昼、晩、2本ずつのが、1本飲んだことにして、1本は隠して、ばれなかったがね、ねっ。家族にも会えんし、とにかく面会は……。もう、がん細胞はもうそれで終わりと思うたんじゃけど、丸山ワクチンとか、いろんなことをね、やったんです、そんなときに。それで、5年ぐらいたったんかな。もうがんとおさらばじゃ、やーいと。ところが73歳のとき、肝細胞がんいう病名をもらって、肝臓がんでした。これは、うまいぐあいに3割ぐらいを切って、肝臓が





ね。で、7割を残していう状況やったんです。壊れないのよ、肝臓が。わしゃね、こんなもんじゃないか思いました。これはね、このように切ることができるんです。これは。こうは切れんけえ、こう切れるんですわ。それで、こちらが70%ある、残りがね。30%。多少、普通の人たちよりは、これぐらいのところがかうなるとよと、肝臓が、私の場合は。これを3年間ぐらいは、73歳、74、75、76、最終的には4回目、一番最後が62時間の大手術して、大したもんじゃろ思うたよね、28%、やって、今再発はなし。

たったこの間ね、6月に検査があつて、肺のほうへの転移はない、大丈夫だとお墨付きをもらつて今日の日になった。移らせちゃいけないけえね、被爆の勉強しに行つて、移つてきたんですよと言われとうないし、そういうことがあつて、もう、それはそれで。で、そこで初めて、助かつたんよ。

最後の76歳のときがね、ちょっと、深いところにあつて、それまでも、ちょっと、30日がペアになつて、2カ月間ね、風呂に入っちゃいけない、シャワーも無理、体中がかゆいし、もうね、そんなときの状況いうたら、人に言われん。肝臓。で、

55歳のときに……、話がさかのぼるんですが、この黒目のこっち側のほうに、黄斑症いう、黒いの、突然見えんようになる。何かのことでなるらしいんじゃけど。で、眼科の先生のところに行つて、もう、右目はこれで、まずそこで目を手術してもらつて。こういう、顕微鏡みたいなのを持ってきても見えん。しかし、こっちのほうから押されると何でも見える不思議な状況があつたりして、何かな思たんです、アゲイシ先生、相談して、そこでね、もう、こっち側だったら、左目は一生、うちが保証してあげるけえ、左目はずっとええよと、あなたが死ぬまでは。今までこっち側だけが、こっちが、鼻の穴の、下のこれ、当時ね、風邪引いたりして詰まったら、こっちではあはあと息すりゃいいけど、片っぽだけあけとるんですわ、鼻も耳も。同時に、こっちが聞こえん、こっちが聞こえん、どっちかがあるんですわ。とにかく安心しときんさい、ほいじゃ先生、暗いところで本読まんようにとか、何やかんや言われてから、無理して目いつも明るうてやれるつてもんじゃなし、無理する場合もあるな。そういう場合は、眼鏡かけとうないけどもね、ほいじゃけえ、安心しときんさい。私は実際はね、これつて読めるんよ、眼鏡もなしで。白内障の手術しとるからね、昭和20年8月6日の、これにしてもね。関西のイハラ病院、初の30%除去、60日間帰さん。で、こがんで、62歳で転職、ほいじゃけん、これを出しても構わんのよ、こうしたとき。ほして、格好いいやね、ないほうが。ねえ。で、年とるとね、ここがね、曲がつてくる。

どうやっても、ここ、たるみが出る。たるみが、隠すたびに、眼鏡でそういうふうにして、これで隠しとる。そういうことで、安心した。

今、実は一生懸命やりよった会社も55歳で一度やめて、健康に関する仕事をしとって、そういう世界に飛び込んだの。で、62歳で会社を興して、80歳で、まだ現役の途中です。仕事をしながら、こういう被爆体験証言者として、広島にはこういうことをやりよる変わった男がおるで、よくそれは、ツボイスナオ先生の写真がどっかで出てきた思うが、あの人が93歳かな、今、現役でおってんよ。そこら中、医者通いながら、何やかんやと。いつも、「何もやることない」って言うと、「みんなに元気を与えるために、表現活動をせえ」と言うわけですよ。「はい」言うわけです。このとき私はね、一旦約束したら絶対に、今日、例えば調子悪くなったとして、「すいません、ちょっと行けません」なんて言われませんやん、せっかく皆さん今日来てくださったのに。必ず1時間前に行って、これをやってやること、そう思うんです。

1つだけ。これは亡くなった人からの手記をいただいとるの、これだけ発表させてください。これをやり始めると2時間かかるけど、省略して1分ぐらいでやります。

「原爆の恐ろしさは、当時、広島にいて洗礼を受けた人以外には、いかに口で幾万遍となえてもわからないじゃろう。現在では、この原爆の千倍程度の水爆も完成しているとのこと。万一、これを使用

することともなれば、地球上の人類は全滅するほかになく、この際、国を挙げて原爆兵器の使用禁止を叫ぶべきであると思う」いうて、手記を書いてもらったわけ。このときにね、水爆の話が出てないんで、わりかし早いときに書いた手記なんです。はあ、ええこと書いたな思うて。

それから、私は62歳で会社を興すときに、小学校時代の先生、もう亡くなったけども、テラニシ先生、音楽の先生が、4、5、6年、3年間教えてもらった先生、ずっとつき合いで、62歳である相談に行ったときに、怒られまくったのよ。ばかたれ、ばかたれ言うて。「家族に相談なしに、またおまえは勝手に、会社して社長なんて、ばかなことをする」。「何歳までやろう思いよる?」「まあ、会社興して、10年やそこら」と。そしたら、「ばかたれ」言うてね、今まではないが、ばかたれって怒られた。「62歳の倍、124歳を目標にやれ」言われて、「はい」言うて。うっかり言うたんじゃが、考えてみたら124歳いうたらね。今80じゃけ、まだあと44年も……、何ほ何でも限界よのう思うんじゃけど……。

よいしょ。そんなことがあったりして、質疑のところへ移りましようかね。





～ 派遣生との質疑応答 ～

【住田】 さっきお話にもあったように、たくさんの身近な人とか大切な人を亡くされて、原爆を落としたアメリカを今、憎んだりとか……、憎いっていうか、そういう、何でこんなことをしたんだってという怒りとか、そういう気持ちをアメリカに持っているんですか。

【大隅】 実はね、思ってもどうしようもできんけん、その話は、これは悪いんじゃが、どうしようもないんじゃけん、そう言ったらドイツや、ヒットラーね、あれはもう、怖い話。どうなんじゃろうかと思うじゃない。ね、不思議に、あるよね。ようわからんけど、我々は。そういう、ごめんなさい、答えがわからんです。

【野村】 疎開をしたときに、周りの人たちとかは、どういう反応をされてたんですか。

【大隅】 ああ、疎開へ行かされたわけじゃないのよ。小学校4、5、6年生は集団疎開で行かされたので、違います。そういうことを全く知らなかったの、じゃけん、コメントのしようが……、ごめんなさいね。

【麻生】 学校から帰ってきた、帰る途中に爆弾が落ちて、ピカッとなって、いつの間にか家に帰ってたというふうに聞いたんですけど、母親が見たときに、ガラスとかみみたいなものが少し刺さってたというふうに言われていたんですけど、そのときに体に痛みとか、そういうものは感じたんですか。

【大隅】 そのときをもう一回再現すると、ピカピカッと光って、こうした先に、ド

カーンと音がして、一目散に家へ向けて帰ると。だから、もう、覚えてない。そして帰ったら、あんだけの状況じゃ、この辺へ傷がついて、この辺に血がついっとた、背中も。バシャッと水をかけて洗うて、はい、終わり。トマトとってこい言われて、山へ逃げて、それだけよ。

【二上】 原爆が落ちる前とかに、いろいろ、空襲とかもあったと思うんですけど、原爆とそれ以前の空襲とで、大隅さんが感じたときにどういう違いがあったと思いますか。

【大隅】 小学校の2年や3年ぐらいの場合は、ようわからんのよね。何か、サイレン鳴ったら防空壕へ逃げよと、子供扱いじゃけ、はよここ引っ込め、地下のちょっとしたところへ、もう、20人ぐらい入れりゃええような穴をそこら中に、空き地に掘って、薄暗いとか、中に電気もないし。ようわからん。あんまり、7歳やそこらだと何でも食べて、あるもので。イナゴ・ドジョウ・大根、ただで食べられるやつ。以上。

【金子】 原爆が落ちたときの、ごみがあるじゃないですか、廃材みたいな。それはどこにやったんですか。

【大隅】 廃材はね、廃材ね……、どうしたんじゃろか、わからんわ。死体だけはまだ強烈に覚えとるけど。多分、この界限から、さーっと……、ここは偉そうに公園みたいになつとるから、中に置いといたんじゃないかね、廃材を。あれだけの、どうもしようがないよね。焼いても焼いても焼けんわけじゃけ、セメントなんか焼けんもんね。鉄も、わからんね。

どっか大きなところでそんなのもやったんかもわからんが、わからん。わからんことだらけ。

【桜井】大隅さんにとって、今の生活っていうのは幸せですか。

【大隅】うん。生きとる幸せがあるね。2人の娘がそれぞれ3人ずつ子供をつくって、私は経済的に2人しか子供がつくれなかったけえ、3人ずつ、娘が嫁いだ先で、長女は、男、女、男。次女は、女、女、女。さすがに4人はおらんけども、立派に生活できとるけえ、よかったなあ思うし、答えはそれぐらいかな。

【小倉】原爆が落とされた後、一瞬で焼け野原になって、その後の復興ってどれぐらいの時間がかかったんですか。

【大隅】これって、まだ、時間経ったところでも、自分自身がなぜこういうことをやりよるかいうと、二度とこういう目、皆さんにしてほしくないのね。人間、鉄砲持った先祖が、ばーっと粉をまいたら、めちゃくちゃじゃん。核いうのはそうでしょう、絶対に、そういうふう思うね。答えにならんかった。そう思う。

【鈴木】乾パンとか配給とかで苦しい生活をされていたと思うんですけど、その中で、広島に原爆が落とされた前と後で、やっぱり後のほうが、ご飯とかは少なくなったりはしたんですか。

【大隅】めちゃめちゃ食うもんがなかった、しばらく。しかし川はね、死体が、こう浮いとったけえね、入ってエビじゃ、何かとるのも厳しいよね。だからカエル、食用ガエルは持って帰ってね、大人に焼いてもらうんよ。うまいんよ、これが。

これが一番ええ。ありがたいこと。ずっと、四六時中腹が減つとる。いつでも腹が減つとる、おかしいぐらい。

【鈴木】もう一つ、聞いていいですか。参考書とか、広島のこと……、私たちの1個上の先輩が行ったときの広島での、被爆者の方々に聞いたときの感想文などを読んだんですけど、そこには、大隅さんみたいな人たち、被爆者の方たちがいっぱいいて、それを踏み台にして今の平和があるというふうに皆さん書かれていたんですけど、原爆を落とされた……、落とされることはすごくよくないことで、絶対にやってはいけないことなんですけど、被爆者として、日本だけが平和を第一に考えられるということでは……。原爆が落とされたからこそ今の日本があるって考えるのは、何か、いいことなのかなって、思ってます。

【大隅】それって、そういう考えは、私はようしないね。不思議とね、歴史をずーっと勉強しまくって、それでもやっぱり、日本軍、支那を相手にとか、あっちのほうの敗戦も、相当生臭いのをやつとるよね。そしたら、そこも取り上げてわいわい言うたところで、人ごとよ、わしら。それよりか、まあ、男と女おるんじゃけ、向こう三軒両隣、とにかく近所の人に嫌われたんじゃいけんわいな。まずそこから生活を立て直していきやうって思うよ。一番難しい質問じゃけども、ようわからん。ようわからん生活に追われればなし。

【山下】さっきのお話でも、近所の人とのつき合いは大事って言ってらっしゃっ

たんですけど、食料や水がない中で、少ない物資の中で、近所の人と取り合いや、もめごとになったことはないんですか。

【大隅】 ないね。いや、あったんじやろうけども、ない。誰かが気を配ったんじやないかね。今でこそあれじやろ、昔は一番困ったのはトイレ。ぼっとんじやけ、ジャージャー流れる洋式トイレは当時はないけえ、あれが一番困ってたんじやないかな。新聞紙が、うんちは、新聞紙で、こうやって、ほんまに。だから、そう不便は感じてないから。

【清水】 戦争があって、空襲があると、やっぱり学校も焼けてしまっていないということで、よく、青空教室というのをやってるとするのは、結構、小学校の戦争の勉強などでも習ったんですけれども、そういうのも実際に体験されたりしたんですか。

【大隅】 私は、終戦直後、すぐ普通小学校へ復帰できたけえ、何とか。そのかわり、運動会的なものはない。なぜなら、グラウンドが野菜畑になるんですから。スポーツするためのグラウンドをね、野菜畑に。けど、そこ、掘ったとしたら、下にがれきが入るとるかもわからん。多分あれじやないかね、あれだけの廃材を、あつという間になくなるはずがないよ。平和公園の、この下の。多分、この界限なら、あるわい。

【田中】 原爆が落ちたことで、環境や生活が変わったということなんですけど、今も原爆保有国があることについて、どう思いますか。

【大隅】 実際問題は、生活に……、私は

マジで124歳までやるつもりじゃけ、まるっきり狂うとかいうのは思うてない。毎日が楽しい。でもやっぱり、女房が死なずに。逆にそこまでになると、大好きな麻雀とか、大好きなお酒、大好きなたばこも控えざるを得んから、しかし、元気になるさえすりゃばいつでもいいじゃないかと。だけど、何においてもね、うまいんよね。生活の知恵なんじやろうか、それも死ななかつた生活です。

【折原】 私は以前に、原爆投下後に防火水槽に飛び込んで固まった死体があると本で読んだことがあるんですが、それって実際に、ほんとうにあったんですか。

【大隅】 あったんじやろうね。とにかくね、食べるものはない、水も欲しかったのは間違いなし、水。とにかく水も欲しい。今でも、西日本の災害にしても、あれと一緒に。たまたま大雨が降り注げばいいけど。

【牧田】 大隅さんが病気を発症したのは、放射能とかが原因なんですか。

【大隅】 これはね、私は放射線の影響はあると思うとる。でも、母親に聞くと、小学校卒業するまでは近所のお医者さんにかかっちゃ、そうじゃないかって言われて、そういうことにしてる。自分が、原爆症、原爆手帳をもらえるから。それはみんなの、医療費は全額、国が見てくれるもんだから。それはむしろ隠れて、みんな大変医療費払わなきゃなんない。私は手帳を持つとるから医療費はただ。ただで国が面倒見てくれる。じゃけん、そういうのも厳しいにはあるよね、ちょっと、それはわからんね。

《被爆者講師プロフィール》

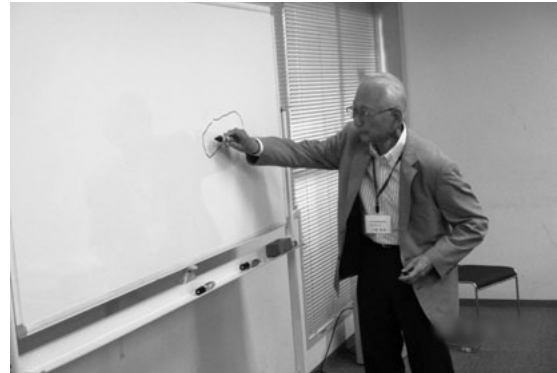
【鈴江】原爆が投下される前などに、空襲が来て、平和で争いがなくなるようにと願われたと思いますが、昔と今では、平和についての考え方は変わりましたか。

【大隅】今は、例えば、ピストルで相手にできんでしょう。日本、町内の友人、知人、広島市内からの学生同士のけんかも、今はね。何もわからなかったね。今もって原爆の成果……、原爆のためにこういう病気になったんやから、わからんこともないんじゃが、証拠がない。全く。だけど、真逆の道によるかもわかんし、よるんかもわからんし。で、薬も多分、飲まんでも、やめたらもたないし、これはね、わからんことだらげやね、人間の世界って。答えになりませんね。すみません。

【石】原爆投下後に、広島には植物がもうずっと育たないといわれていたと思うんですけど、今ではたくさん育っていて、植物が広島にまた咲き始めたのって、いつごろからですか。

【大隅】一説によると、草木も咲かないとか、あれもうそやね。少々のあれでは……、要するに、ぺんぺん草はすくすく育つように、生えていたんじゃないかね。

平成 31 年 8 月 5 日 (日)  
YMCA 国際文化センター



【氏名】 おおすみ 大隅 かつと 勝登

【被爆時年齢】 8 歳

【被爆時の状況】

1945 (昭和 20 年) 年大隅氏は小学 3 年生であった。朝、いつものように「いただきます!」と挨拶をして小学校へ向かう途中、工兵橋の近くにて被爆をする。その瞬間について大隅氏は「突然にピカピカと光ったら、ドッカーンという大きな音と悲鳴。」と語る。このときに落とされた原爆については「大きな焼夷爆弾だと思った」と語った。その後は母の指示に従い、山へ避難し、急場をしのごう。

40 代半ばからガンを患い、回復と再発を繰り返す。現在は健康であり、健康業界の会社を設立している。



## 5. 碑めぐり講話

日時:平成 30 年 8 月 7 日 (火)  
 午前 9 時 00 分から 10 時 30 分  
 場所:平和記念公園内  
 講師:<sup>にしおか</sup> 西岡 <sup>ゆきお</sup> 由紀夫 氏



碑めぐり講話 ルートマップ

広島市ホームページより

